

| | |
|-------------|---|
| 開催地名：千葉県館山市 | |
| 開催日時 | 令和2年1月30日（木） 18：30～20：30 |
| 開催場所 | 館山市コミュニティセンター |
| 語り部 | 齊藤 賢治（岩手県大船渡市） |
| 参加者 | 館山市職員、地域防災リーダー、消防団等 約100名 |
| 開催経緯 | <p>当市は、南海トラフ地震防災対策推進地域に指定されており、今年度に県から示された最大規模の津波浸水想定を基に、津波ハザードマップを改訂する。過去には元禄地震や大正地震による津波襲来の経験もあるが、当時の伝承がなされていないのが現状である。そのため、住民の津波に対する危機意識が希薄であることが課題である。</p> |
| 内容 | <p>（１）はじめに</p> <p>津波の恐ろしさは、その速さにある。例えば、太平洋を渡るときの津波の速さは時速700～800キロメートル、ジェット機並みの速度で伝播する。いち早く高い所にのぼることを心がけてほしい。</p> <p>犠牲者が被災した場所は、自宅などが44.9パーセントと最も多い。これは逃げなかった方々である。理由の大半は、「今まで我が家までは津波が来たことがない」というものだった。「津波てんでんこ」はよく知られる言葉になったが、「津波が起きたらそれぞれ逃げましょう」という意味である。その教訓は東日本大震災でも生かされなかった。家族を探しに行つて命を奪われた方が多い。それぞれが安全な所へ逃げるのが「津波てんでんこ」の極意である。そのためにも、日頃から家族で逃げる場所を話し合っておき、できれば訓練をしておくことが望ましい。また、別々の場所で被災したときのことを考えて、集まる場所を決めておくことも重要である。</p> <p>（２）東日本大震災の被害状況</p> <p>東日本大震災発生時、大船渡湾の堤防は全て破壊、粉碎した。水の進行方向へ向かった車は助からなかった。対策としては高台へ逃げるか、Uターンするか、乗り捨てて高台へ逃げるべきである。車は水深30センチメートルもあれば危険である。津波の知識が不足していた人や、家にもものを取りに戻った人などが被災した。自分だけは大丈夫という心理学用語「正常性バイアス」が働いた。逃げない方法を探してしまう認知的不協和も働き得る。また、一晩中寒かったため高齢者は低体温症も発症した。</p> <p>避難動向のグラフによると、犠牲になった方の約半数は自宅にいて逃げなかった人だった。また、行政が指定した避難場所でも犠牲者が出た。津波は家を簡単に流す。遺体安置所では水死体より圧死体が多かった。震災後、電気、ガス、</p> |

水道などのあらゆるライフラインが断絶した。私の場合、風呂に入れたのは発災後10日たってからだった。

(3) 最後に

震災後、困ったことはまず水である。そして2つ目に食料、3つ目がトイレである。さらにぜいたくを言えば、ガソリンが欲しいとか電気が欲しいとかガスが欲しいとか、文化的なものばかりの要求になってしまう。とにかく震災直後からサバイバル生活が続いた。

人間は通常の生活で、1.5リットル以上の水を体に取り込んでいる。震災でライフラインが断ち切られたケースでは、水は一人あたり最低3リットル程度は必要である。東日本大震災の際に、私の居住する地域に給水車が来たのは、震災から4日後であった。地域によって異なると思うが、水の備蓄はある程度必要だろう。

カセットガスコンロ等のアウトドア用品や、作業着は役に立った。また、水の運搬には一輪車が大変役に立った。また普段から生活水量を把握することも大切である。災害発生時、トイレは水に限りがあったため、雨水を溜めてろ過し、沈殿させて使用した。

私たちの地域では、震災直後から食糧が不足した状況が続いたが、食料を皆で分け合ったりして数日間をしのいだ。これは普段から近所の方々とコミュニケーションが取れているからこそ、自然にできたことだと考える。災害時は、公的な機関の援助を得るまで時間がかかるので、近所の方々との関係が重要になってくる。震災直後からお互いに無事を確認し合うことのできるよう、普段からコミュニケーションの形成をしておくべきである。災害時に備えて、「助け合おう」、「物を分け合おう」という意識を常に持つておくことが必要である。皆さんも是非、地域でのコミュニケーションや連携を大切にしていきたい。



開催地より

実体験を基にした講演を聴講し、逃げ遅れなど本市でも同様のケースが起こりうると感じた。備蓄品についてのお話も参考になった。今後の防災活動に生かしていきたいと思う。